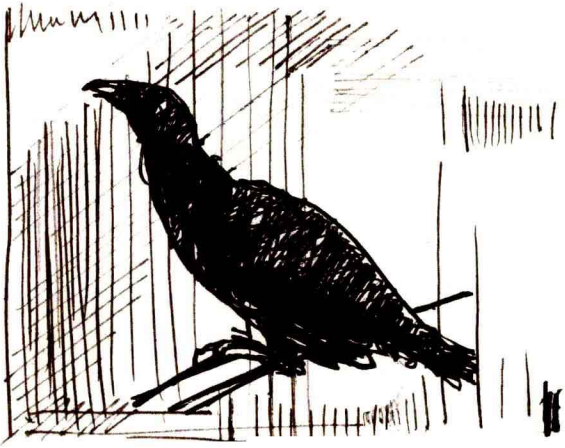
明日を思わず

澤野久雄

明日を思わず

澤野久雄



明日を思わず

昭和四一年二月一〇日　第一刷発行
著　者　澤野久雄
発行者　野間省一
発行所　株式会社　講談社
東京都文京区音羽町三ノ一九
電　話　東京（942）一一一一（大代表）
振　替　東京三九三〇
印刷所　星野精版印刷株式会社
製本所　有限会社文信社
定　価　五八〇円
落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。
© 昭和四一年

Printed in Japan

目

次

十九歳……七
画家……三
梅雨あけ……四八
働くということ……六二
風の通る家……七七
事件……九一
新しい人……一〇三
別れ道……一一七
夜深く……一三三
鳥の声……一四七
アヴァンチュール……一六九

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

秋草……一九三
危機……二一三
錯誤……二三九
つつましき晩餐……二五一
再会……二七〇
風邪ひき鳥……二八七
花冠……三一〇
暮夜……三三三
誰？……三四七
今日のいのち……三六二

裝幀　澤野水櫻

長篇小説

明日を思わず

十九歳

「二美……」

階下から、母親の声が小石のようにとんで来たと思うと、

「ちょっとそこまで行って来るから、お店、たのんだよ」

広い通りに面した窓ぎわにいて、二美は一度、ゆっくりと階段のほうに目を投げた。

その、六畳の間は、いくらかすすけていた。近所隣に工場があるわけではないが、中川に近く群立する煙突から、知らぬまに煤煙は流れて来るのだろう。風が強ければ、大通りには埃がたった。毎朝、丹念にそうじはするのだが天井も柱もくすんだ色だった。色あせた茶色の壁に、妹の三津が出がけにつり下げて行った、薄水色のスリップだけが美しい。

窓には、六月の雨が降っている。東京は水不足で、この一、二ヵ月、大さわぎをしているというのに、降ればやっぱりうっとうしい。

——都内でいくら降ったって……。

水源地の山々が乾いていては、水は豊かにならないのである。

ぬれている窓に近く、古い花むしろを敷いて、鳥籠が一つ置かれていた。籠の中には、マレー産の九官鳥が一羽、くびをかしげてこちらを見ている。

「こんちわ……」

二美はやさしく、声をかけた。

微笑をふくんだ声である。そういえばこの鳥と「ふたりだけ」でいる時が、彼女の心のいちばん和んでいる時かもしれない。

「こんちは……」

同じ言葉の戻って来るのを予期しながら、二美はもう一度くり返した。と、九官鳥はかすかにのどにかかった声で、

「さよなら……」

「あら、また……。駄目じゃないの。こんちは、よ」

黒い鳥は、しきりに首をかしげて見せる。二美のいうことを理解しようと、努力しているかのようだ。

真っ黒な羽毛に、雲母のような光がひそんでいた。尾は短く、小さくまとまった姿だが、くちばしと足だけは、火のようにあかい。わずかに曲ったくちばしは、先にゆくに従って細くなり、細くなるにつれて色も薄くなる。爪の近くは、ぼかしたようなオレンジ色であった。

その色の美しさが、少女の心を惹きつけるのだろうか。佐治小鳥店に飼われている何百という鳥の中で、二美はこ

の一羽だけを特に愛した。商品ではあるが、店には置かない。
「お店に置けば、ほかの鳥のなき声を覚えてしまうから……」
二美はそう言って、いつも二階の座敷で飼っている。買いたいという人が現れた時、二美は容易に、この鳥を手放す気になれるだろうか。
——そうだ、おかあさんが出かけていたんだわ。
籠を捧げるようにして、立った。階段を下りようとすると、
「こんちは……」
こんども、九官鳥の声ではなかった。階下に、客が来ているらしい。若い男の声である。
「はい」
と、急いで階段を途中まで降りて、二美は、ああ、と足をとめた。

足もとからは、小鳥の声がわき上るようである。
セキセイインコ、カナリヤ、文鳥、目白に錦花鳥、壁ぞいに棚をつってならべた竹籠から、庭箱から、何百という鳥がいっせいに鳴き声を立てる。その声の中に埋まっていると、二美は時々、目がくらむような気持になるのだが、——いま、彼女は見るのだった。鳥籠にかこまれたせまい土間に、長身の青年が、いくらか背をまるめるようにして立っている。青年の目が、階段を見上げたかと思うから、片手で思わずスカートを抑えながら、
「いらっしゃい」
声が、奇妙にはずんでいた。
顔見知りである。といっても、単に顔見知りというにすぎない。二十七、八になるだろうか。うすいねずみ色のカッターの上に、同じ色の背広を羽織っている。二美の家からは余り遠くない所に、住んでいる青年だ。二、三軒先の横町をはいって、裏通りに出て、——そこから先はどう行くのか、どんな家に住んでいるのか、彼女は知らない。が、通りで会えば、おや、というような目を向けて来る。向うでも、前から二美を見知っていると思われる。
「鳥籠がほしいんだけど……」
「何を、お飼いになる……?」
階段を降り切ると、サンダルを突っかける。九官鳥の籠を台へ置いて、土間で向い合うと、青年は手の中に小さな鳥を抱いていた。
「あら、十姉妹……?」
「十姉妹ですか、これ……」
白い小鳥の羽毛の中に、黒い斑点がいくつか散っていた。
「いい十姉妹だわ」
「お宅の鳥じゃないでしょうね」
「あら、なぜ……?」
青年の目が、明るく笑っている。やさしい目である。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

「さっき、僕の部屋へ、飛びこんで来たんだ。かわいそうだから、飼ってやろうと思ったんだけど……」
「あら、そう？」
二美は、店の十姉妹が逃げたとは聞いていない。
「うちの十姉妹じゃないわ。飼っておやりなさいな。この鳥は弱いから、放してしまってはすぐ死ぬわ」
しかし、見まわしても格好な籠はなかった。
「子供をかえす積りなら庭箱……」
と、正面だけに金網を張った十姉妹の巣箱に目をやって、
「庭箱でなければだめなんだけど、一羽だけなら籠がいいでしょ？　ちょっと待ってて……」
言い捨てると、身をひるがえして、横手のせまい空地に出た。空地に、小さな、不細工な物置ができている。戸を開くと、手近にあった鳥籠を拾いあげて、
「これで、どうかしら？」
籠は、少し汚れていた。だいぶ使い古したものである。
青年は土間から出て来ながら、
「これ、いくら？」
「いいわよ、こんな古い籠……」
「そんなこと、言っても……」
「いいってば！」
そう言いながら、二美は急に頬をそめた。

青年は、黙って二美を見返した。

美しい目である。白い部分が青みがかっていて、少年のような清潔さだった。しかしその目の奥からは、一種の当惑が、ひるがえる木の葉のようにのぞいている。
「高くお金をとるというのなら、文句を言ってもいいけど、お金はいらないと言っているのよ」
「だって、君の家、損をするじゃないか」
——そりゃ、得にはならないわ。
と思ったから、思わず吹きだしそうになった。が、痛いところを突かれた、という気もしないではない。
父親がしっかりしないから、——今では一応、勤めてはいる。勤めてはいるが、一家をささえるだけの稼ぎがあるわけではない。一家五人のところへ、月二万や三万の金では、どうなるものではない。思案に余って、——というよりは、性格的に父親よりは積極的な母の春が店を開いて、小鳥屋をはじめてから十年になる。けれどもやっぱり、女手の仕事だった。小鳥の鳴き声はにぎやかだけれども、それほど家の中が潤ったとはいえない。住みなれているから二美はなんとも思わないが、よその人の目には、みすぼらしい店にも映るだろうか。
「よけいなことよ、そんな心配……」
二美は怒ったように言うと、身をひるがえして店にはいった。棚の端に突っこんであったはたきをとると、その場でせわしげに竹籠のほこりを払った。
それから棚の餌壺をとった。水入れを手にした。竹籠の

口を開いて、納める場所に納めると、
「さあ、その鳥、お出しなさい」
十姉妹は、右手の掌にあたたかかった。おびえているらしいのが可哀そうで、ちょっと小さな目をのぞいてから、くちばしの先についとくちびるをよせた。
かわいらしい、無邪気な接吻だった。二美はやはり、小鳥が好きなのかもしれない。
時々、手の中の小鳥のくちばしに、くちびるをよせるくせがあったが、家の者は誰もあやしまなかった。彼女自身も、おかしいとは思わない。可愛い赤ん坊を抱くと、つい頬ずりをしたくなる。それと同じことなのだ。
しかし、目の前で突き出されたくちびるは、青年の目には異様に映ったであろうか。気づくと、一層、当惑した表情だ。相手が当惑していると知って、二美の中にも少女らしい狼狽が来た。
むしろ荒々しく、小鳥を籠の中に投げ入れた。小鳥は一瞬、あわてて羽ばたき、細い止り木の端にとまると、こんどは臆病そうにからだをすくめた。
二美は籠の上に、袋入りの餌を置いた。
「さあ、持っていらっしゃい」
男は、やあ、と言って籠をうけとると、
「ありがとう。せっかくだから、もらって置きます」
「水、不精をして腐らしたら駄目よ」
「ああ」
二、三歩、表のほうへ歩き出したと思うと、もう一度ふり返って、
「姉さんによろしく」
「お客さんだったのかい?」
母親の声が降って来た時、二美はまだ店先に立っていた。洋傘を傾けて帰ってゆく青年の、後姿を見送っていた。
——姉さんの知り合いなんだろうか。
そうとは知らなかった。知らないから、つい好意を見せたのだが、考えて見ると損をしたような気がする。
——姉さんを知っているなら、はじめからそう言えば……?
しかし、どういう知り合いだろうか。
日曜日ではなかった。
二美の父親は、いつものように工場へ出かけたし、妹の三津は、中学校へ行っている。姉の一枝は、——これは日曜日でも休みとはかぎらないが、——銀座の店へ勤めに出た。家にいるのは、母親の春と娘の二美ばかりである。
二美だって、勤めに出たい。勤めれば熱心に仕事をするだろうし、そうすれば月給をもらえる。身のまわりのこまごましたものを買うにまで、いちいち母親から金をもらわないでもすむ。しかし、母親は、
「お前なんか、勤められやしないよ」
と、いっこうに話に乗ってくれなかった。

「そんなことを考えるより、小鳥の餌でも作りな」
二美はいつもそういう母親と一緒にいて、少しずつあきらめはじめていたようである。あたしは駄目なんだ、という気がしはじめている。姉のように花やかな顔をしてはいないし、妹のように可愛らしくもない。
もう、母に向って口答えをしなくなって、随分経つ。腹の立つようなことがあっても、じっと抑える習慣がついている。近所隣の人たちは、
「あんたがいっとう働きもんだよ」
と言ってくれるが、いくら働いたって一円にもなりはしないのだ。すると、あきらめが彼女の口を閉ざした。口数が少くなると、胸までとざしているようだった。そのかわり、九官鳥とはいつでも話をする。鳥は、いやなことを言わなかった。二美を罵りもしない。人間の言葉をしゃべっても、彼女の心を傷つけることはしないのである。
そんな二美が、籠を買いに来た青年に対してだけ、珍しく歯切れよくしゃべったのだ。閉じこめられていた部屋に、急に窓があくような気がしたのだが、——姉さんによろしく、と言われると、開いた窓から嵐が吹きこむようであった。
——あの人の、お勤めは……？
男の後姿を見ながら、まさか失業者ではあるまいと思った。しかし、昼日なか、家にいるのだとすると、果してどんな商売をしているのか。

「十姉妹、売ったのかい？」
おどろいたように母親をふり返って、
「ううん、籠だけ……」
「ああ、物置にあったろう？　いくらで売ったの？」
——しまった！
と、思ったが、追いつかなかった。ただでやったと言えば、取り返して来いといわれるに決っている。
「五百円よ」
と、二美は母親のあとについて、店にはいりながら言った。
「だって、もうよごれて、こわれかけていたんだもの……」
母親の目が、ちらとこちらを見た。とげのある目である。この目に会うたびに、二美は心がひるむようだ。思わず小さな声になりながら、
「もう、売り物にはならないわ。あんな……」
「冗談じゃないよ。お前、そんなことで商売になると思っているのかい？　あれはまだ、千円で売ったって……」
けれども二美は、いつまでも母親の相手になってはいられなかった。その五百円を、早くお出し、と言われれば、たちまち窮地に陥ってしまう。サンダルを脱ぐと、急いで階段を駆け上った。北向きの六畳の間にはいると、あわてて古い箪笥に手をかけた。三つ重ねの箪笥の、上から二つ

目の引き出しが、彼女のもの入れになっている。
引き出しを開くと、スカートやブラウスが整然と重ねられていた。その底に、小さな革の財布がしまってある。それを開くと、几帳面にたたんだ五百円札をぬき出した。あとには百円札が、何枚か残ったばかりである。それが現在の、彼女の全財産だった。
財布をもとに戻すと、すぐにまた階段を降りた。
「はい」
と、その札を母親に手渡す。
「まったく、ちょっと留守にすると、これだから……」
母親は受けとった五百円札を、無造作に帯の間に押し込んだ。それから店の中を見まわして、
「まだ、ちっとも片づいてやしないじゃないの」
いつも、こういう調子なのである。
勤めにも出ないで家にいるから、——それも、彼女自身は勤めたいというのに、強いておし止めて、家へ置いておきながら、——二美は二六時ちゅう、追いまわされる。それでいて小遣いといえば、月に千円か千五百円きりだ。
姉の一枝は、月給のうちから三千円だけ家に入れればすんだ。残りは全部、小遣いにしてしまう。それどころか、服でも作った月は、
「今月はつらいわ」
胸をはってそう言って、母親に渡す金の額を減らした。
「いいわ、姉さんは……」
思わず二美がそういうと、
「あたしは働いているんだわ」
すぐに、激した声が降って来るのである。
「なによ、二美なんか何もできないくせに……」
そう言われると、二美には答えようがない。屈辱の底で、堪えることになれてきた。尤も、時々は堪え切れなくなるが、口答えをしたら、さらに激しい姉の罵声を浴びなければならない。

二美は毎朝、小鳥の声で目をさました。
六時半に床を出て朝食の用意をし、妹と姉と父親とを、順々に学校と勤め先とへ送り出す。急いであと片づけをしてから、小鳥の世話をはじめる。小鳥によってそれぞれに餌料の配合もちがうから、一段落すると、もう十一時になっている。手間どった日は、昼になってしまう。
午後は、洗濯もしなければならない。店番もしなければならない。
やがて、妹の三津が学校から帰って来る。するとそろそろ、夕飯の仕度だ。
——どうしてあたしばかりが、こんなに使われるの？
彼女は働くことが、きらいではなかった。しかし、家庭内の不平等には、子供の時から漠然と気づいていた。
「一枝は働いているんだし、三津子は末っ子だから……」
母親の春は、誰に向ってもそう言った。あげくの果て

は、小鳥の世話をしている二美の背中に、白い目を向けて、
「この子が男に生れていたら、家でも楽しみがあったんですけれどね……」
「そんなことを言っちゃあ……」
相手がとりなそうとすると、春は逆に強い口調になって、
「この子が生まれる時は、お産婆さんもきっと男だと言ってくれたんです。それがあんた……」
まるで、女に生れたことは、二美自身に責任があるとでも言いたそうな口ぶりである。
二美は何度、耳を覆おうとしたことがあるかしれない。
——誰が、生んでくれと頼んだの！
小さい時からいく度となく、胸の中で、抗議したものだ。しかし、それも口には出せない。口にすれば母親が、いっそう威丈高になるのがわかっている。
青年に鳥籠をやった日の午後、二美は二階の部屋で九官鳥と話をした。
「こんちは……」
「こんちは」
黒い鳥は小首をかしげ、二美の気持をくみとろうと、努めているとでも言いたげな表情である。
「今日は、損をしちゃったわよ」
「……」
「ブラウスを一枚、買おうと思っていたのに……」
——でも、あの人が喜んでくれたなら、いいわ。
ひそかに、青年の顔を思い出していた。白い十姉妹を大切そうに抱いて来た青年だ。あの抱き方は、親切そうだった。やさしそうであった。その人のためになら、ブラウスが買えなくなっても我慢しよう。
しかし、その青年が帰りぎわ、姉さんによろしく、と言ったのは、どういうわけであろうか。ふたりは知り合いなのだろうか。
その疑問には、すぐに答えが出た。二日たった日ぐれがた、姉の一枝が勤め先から帰って来たと思うと、
「二美！　沼井田さんがよろしく言ってたわよ」
微笑もない顔であった。二美は不意に、胸が波立った。
「沼井田さんて、だれ……？」
「あら、知らない顔をしているの？」
上りかまちで、脱ぎかけていた靴に、まだつま先を突っかけたままの姿勢でふり返ると、一枝の口紅があかかった。目じりにも、うすく墨を入れている。
「すましたって駄目よ」
二美はちょうど、セキセイインコの籠に、覆いをかけているところであった。明るい灯のもとに置くと、小鳥は安眠できないのである。夏になれば、蚊にさされることもある。蚊の被害を一番受けるのはカナリヤだが、——多分、カナリヤの足はやわらかいのだろう。刺されると、無残に

はれ上ってしまう。——しかしそれ以外の鳥でも、夜は覆いをかけてやらねばならない。籠に黒い布をかけていた手をとめて、

「そんなことを、言ったって……」

「知らないって言うの？　沼井田六太さんを……」

「……」

「あんたが、鳥籠をあげた人よ。ただで……。まさか知りもしない人に、ただで籠はあげられないでしょ？　いくら気前のいい二美でも……」

二美は突然、おびえるような目になった。その目が姉の肩ごしに、そっと奥の部屋をのぞいた。台所では、母が夕食の仕度をしているのだろう。水道の音がしている。焼魚の匂いが、ただよっている。

——おかあさんにきこえたら……。

五百円で売ったといっても、邪険な声を浴びせて来た人だ。今度はどんなに叱られるかしれない。

——しかし、あの人もあの人だわ。

母へのおそれとは別に、青年に対する怒りがわくようである。せっかく籠をあげたのに、——しかもあたしの財布から、五百円というお金が逃げ出してしまったというのに、——あの人はなんだって、正直に言ってしまったんだろう。まるで、人の好意を裏切るような仕打ちではないか。

「二美！」

姉の目が、鋭い刃物のように二美へ迫って来ていた。

「あたしたち、うちじゅうで働いているのよ。それだのに、ぶらぶらしているあんたが、人にただで物をあげたりして……。そんな権利が、あんたにあると思う？」

「あの人、姉さんのどういう知り合い？」

「そんなこと、聞く必要はないでしょ？　余り、生意気に人のことにまで立ち入らないで……」

「立ち入る気はないわ。でも、聞いて置いたほうが便利じゃない？」

「便利？　そんなこと、あなたに便利だからって、あたしが答えなければならない理由はないわ」

「……」

「働きもないくせに！」

姉の口から、またその言葉が出た。二美は、力をなくしたように、がっくりと肩をおとす。

——一度、あたしにも働かしてみて！

働かしてくれさえすれば、姉の一枝よりは、きっと立派に仕事をして見せる自信がある。

あらゆる少女にとって、最初に陥りやすい危険な深淵は、

——この家に、あたしというものは要らないのではないか？

という疑問を持つことである。そして、そういう疑問を

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.